

令和8年度自己評価計画書

						石川県立七尾高等学校	
重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評 価 の 観 点	実現状況の達成度判断基準	判 定 基 準	備 考
1 豊かな人間性と国際性の育成							
<ul style="list-style-type: none"> ・校内外のあらゆる活動を通して、多様な他者と協働しながら目標に向かって挑戦し、課題解決ができる力を育成する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・震災に係る復旧復興ボランティアなど、校外ボランティアの推進・支援 ・地域貢献を目指した校内、各部、個人ボランティア活動の随時呼びかけ ・Google Classroomを活用した案内・募集 	生徒会 各学年	昨年度「実感できる」「やや実感できる」と答えた生徒の割合は84.9%であった。Google Classroom等での呼びかけにより、個人で主体的にボランティアに参加する生徒が増加した。今後は、引き続き積極的に周知するとともに、部活動単位での自主的な参加も促していく。	【満足度指標】 (生徒) 校内や「復旧・復興ボランティア」をはじめとした地域貢献ボランティアを通して、「感謝・思いやり・協力」の心が育ったことを実感できる。	校内や「復旧・復興ボランティア」をはじめとした地域貢献ボランティアを通して、「感謝・思いやり・協力」の心が育ったことを「実感できる」・「やや実感できる」と答える生徒の割合の合計が A 85%以上 B 80%以上 C 75%以上 D 75%未満	C、Dの場合は改善策を検討する。	生徒対象調査 (7、12月)
<ul style="list-style-type: none"> ・異文化を理解しながら、ふるさとに愛着と誇りを持ち、グローバルな視点で社会に貢献する資質と態度を育成する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・令和8年度地域の特色を活かしたふるさと教育推進事業 	NSH 各学年	昨年度、ふるさとに対する誇りと愛着を実感できた生徒の割合が82.0%であった。	【満足度指標】 (生徒) ふるさとの良さを知り、ふるさとに対する誇りと愛着を実感できている。	ふるさとの文化、産業、地域で活躍する人達を知り、ふるさとに誇りと愛着を「実感できた」・「やや実感できた」と答える生徒の割合の合計が A 85%以上 B 80%以上 C 75%以上 D 75%未満	C、Dの場合は改善策を検討する。	生徒対象調査 (7、12月)
	<ul style="list-style-type: none"> ・異文化交流の促進 ・トビタテ留学JAPANなどを活用した留学希望生徒への支援 	NSH 各学年	昨年度、異文化について理解を深め、さらに学びたいと感じた生徒の割合が84.6%であった。	【満足度指標】 (生徒) 異文化について理解し、さらに学びたいという意欲が高まっている。	異文化について理解し、さらに学びたいという意欲が「湧いた」・「やや湧いた」と答える生徒の割合の合計が A 90%以上 B 85%以上 C 80%以上 D 80%未満	C、Dの場合は改善策を検討する。	生徒対象調査 (7、12月)

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評 価 の 観 点	実現状況の達成度判断基準	判 定 基 準	備 考
2 進路志望実現のための学力の形成							
<ul style="list-style-type: none"> 基礎学力の定着を着実に進めるとともに、教科横断型の探究型学習を推進し、主体的に困難な課題と向き合い考え抜く力を育成する。 生徒の可能性を最大限に引き出し、多様な大学入試制度の変化に対応できる進路指導を実践する。 	<ul style="list-style-type: none"> 志を築くためのキャリア教育 東京大学主催「高校生と大学生のための金曜特別講座（オンライン）」の実施 PASSLABO、ROJE、UTVC等外部教育支援組織との連携等外部教育支援組織との連携 全国模試の校内採点による早期弱点指導の徹底 学習時間調査 ホーム担任、教科担当者、部顧問による個人面談 進路通信の作成 『Google Classroom 進路支援室』での情報発信 進路講演会 大学入試問題解法研究 習熟度別学習指導（週末課題） スーパー難関大学と難関大学別の講座や個別添削指導 金沢大学出張講座 多様な入試制度に関する研修会 保護者への進路説明会 学習計画の作成とチェック 志望校群別検討会（2年） 志望校検討会（3年） 出願校検討会（3年） 志望理由書の作成（1、2年） 批判的思考力育成 	進路指導課 各学年	昨年度は全学年でA評価を達成し、生徒自身が進路を語ることの自信は向上した。一方で、その内容は抽象的であり、自己認識と具体性の実態に乖離が見られる。今後は、社会との繋がりを見据えたより深いキャリア意識の育成が課題である。	【成果指標】 （生徒学年別） 第1志望に対して明確な理由がある。	高校卒業後について自分の言葉で語ることができると答えた生徒の割合が各学年目標に対して A 100%以上 B 80%以上 C 80%未満	各学年目標 1年120人（6割） 2年140人（7割） 3年160人（8割） Cの場合は改善策を検討する。	生徒対象調査 （7、12月）
		1学年 進路指導課	優れた資質能力を持ち、高い向学心を持つ生徒がいる一方で、生活習慣の改善が必要な生徒や、学習習慣の定着が不十分な生徒がおり、学習を中心とした、高い志に基づいた生活習慣の確立が急務である。	【成果指標】 （1年生生徒） 学習習慣を身につけ、学力を向上させている。	入学後、学力を伸ばした生徒が A 140人以上 B 120人以上 C 120人未満	Cの場合は改善策を検討する。	模試結果分析 （進研模試7月と1月の3教科総合偏差値で比較する）
				【成果指標】 （1年生生徒） スーパー難関・難関大学入学に堪える学力を獲得している。	1月進研模試3教科総合で学力到達度（GTZ）のSランクの生徒が A 30人以上 B 20人以上 C 20人未満		模試結果分析 （進研模試1月）
		2学年 進路指導課	家庭学習の推進や習熟度別指導により学力の底上げを図っているが、学習習慣の確立については、依然として課題を抱える生徒も少なくないため、継続的な支援が必要である。	【成果指標】 （2年生生徒） 学習習慣を改善するとともに、学力を向上させている。	2年次に、学力を伸ばした生徒が A 140人以上 B 120人以上 C 120人未満	Cの場合は改善策を検討する。	模試結果分析 （進研模試7月と1月の3教科総合偏差値で比較する）
				【成果指標】 （2年生生徒） スーパー難関大学・難関大学合格に向けた、高い学習意欲と取り組みを継続して行い、改善できている。	1月進研模試3教科総合で学力到達度（GTZ）のSランク生徒が A 30人以上 B 20人以上 C 20人未満		模試結果分析 （進研模試1月）

<p>・放課後学習会</p>	<p>3 学年 進路指導課</p>	<p>昨年度の結果は次のとおりである。 スーパー難関大学合格者数 4 人 難関 10 大学合格者数 20 人 金沢大学合格者数 25 人 国公立大学合格者数 139 人</p> <p>・家庭学習時間を確保させつつ、自主的、自律的な学習姿勢を確立し、質の高い学習を促している。 ・習熟度別学習指導を進め、下位層に対しては年間を通して課題等により学習を支援し、上位層については個別添削等を継続的に実施している。 ・共通テスト対策、大学入試制度や入試問題の研究を通して、教員の教科指導力向上を図っている。 ・進路指導課を中心とした入試情報の共有体制を構築し、担任の進路指導力強化を図っている。</p>	<p>【成果指標】 (3 年生生徒) 生徒ひとりひとりが高い志望を持ち、進路実現を果たしている。</p>	<p>スーパー難関大学合格者数が</p> <p>A 5 人以上 B 3 人以上 C 3 人未満</p> <p>難関 10 大学合格者数が</p> <p>A 20 人以上 B 15 人以上 C 15 人未満</p> <p>金沢大学の合格者数が</p> <p>A 30 人以上 B 25 人以上 C 25 人未満</p> <p>国公立大学の合格者数が</p> <p>A 140 人以上 B 120 人以上 C 120 人未満</p>	<p>C の場合は改善策を検討する。</p>	<p>大学入試結果</p> <p>* スーパー難関大学とは、東大・京大・国公立大医学科を指す。</p> <p>* 難関 10 大学とは、北大・東北大・東大・東科大・一橋大・名大・京大・阪大・神戸大・九大を指す。</p>
----------------	-----------------------	---	--	--	------------------------	---

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評 価 の 観 点	実現状況の達成度判断基準	判 定 基 準	備 考	
3 教員の総合的な指導力の育成								
<p>・「石川県教員育成指標」を踏まえ、教職に必要な素養、教科指導力、学級経営力、生徒指導力などの実践的な指導力の向上に努める。</p>	<p>・スマートフォン、携帯電話等によるインターネットトラブル（いじめを含む）に関する校内講習会の実施と、新しいトラブル対策のための資料の作成と配付</p> <p>・生徒会によるネットトラブル防止啓発活動の企画・実施</p>	生徒課	<p>昨年度「十分実践している」「やや実践している」と答えた生徒の割合は94.3%であった。スマートフォン・携帯電話等によるインターネットトラブルについて、教員が理解を深め、生徒への予防的指導を行っていることが、トラブル防止につながっている。</p> <p>今年度もこうした取組を継続する。</p>	<p>【成果指標】 （生徒） スマートフォン等によるインターネットトラブルに対する、安全・予防対策を実践している生徒の割合が高まっている。</p>	<p>スマートフォン等によるインターネットトラブルに対する安全・予防対策を、「十分に実践している」・「やや実践している」と答えた生徒の割合の合計が</p> <p>A 100% B 90%以上 C 85%以上 D 85%未満</p>	C、Dの場合は改善策を検討する。	生徒対象調査（7、12月）	
	<p>・「生徒による授業評価」の結果に基づく授業改善の推進</p> <p>・予習・復習の呼びかけ</p> <p>・「探究」で培った指導法に関する研修及び情報共有</p>	教務課	<p>昨年度、国語・数学・英語において「予習や復習（振り返り）をしている」に関して「あてはまる」・「ややあてはまる」とした生徒は、国語65.7%、数学90.0%、英語93.5%、平均83.1%であった。</p>	<p>【成果指標】 （生徒） 国語・数学・英語において「予習や復習（振り返り）をしている」と答える生徒の割合が高まっている。</p>	<p>国語・数学・英語において「予習や復習（振り返り）をしている」に関して、「あてはまる」・「ややあてはまる」と答える生徒の割合の合計が</p> <p>A 90%以上 B 85%以上 C 80%以上 D 80%未満</p>	C、Dの場合は改善策を検討する	生徒対象調査（7、12月）	
				<p>昨年度、「探究の要素を取り入れた授業を実践している」に関して、「あてはまる」「ややあてはまる」と答えた教員の割合は73.8%であった。</p>	<p>【努力指標】 （教員） 探究の要素を取り入れた授業を実践している。</p>	<p>「探究の要素を取り入れた授業を実践している」に関して「あてはまる」・「ややあてはまる」と答えた教員の割合が</p> <p>A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満</p>	C、Dの場合は改善策を検討する	教員対象調査（7、12月）
	<p>・校内でのOJTによる若手研修を、中堅・ベテラン教員の経験を活かしながら効果的に進め、教職員全体の指導力向上を図る。</p>	<p>・若手教員のニーズに合わせたOJTの実施</p> <p>・Teamsを利用した時宜をとらえた情報発信</p>	教務課	<p>教員経験が10年未満の若手教員は、全体の51.0%を占めている。そのうち3年未満の教員は全体の21.2%である。昨年度は「知識・技能・指導力が向上している」・「やや向上している」と答えた若手教員の割合は90.0%と成長を感じることができる環境ができてきた。</p>	<p>【満足度指標】 （若手教員） OJTをとおして教員としての成長を実感できる。</p>	<p>OJTにより教員としての「知識・技能・指導力が向上している」・「やや向上している」と答えた若手教員の割合が、</p> <p>A 90%以上 B 85%以上 C 80%以上 D 80%未満</p>	C、Dの場合は改善策を検討する。	教員対象調査（7、12月）

<p>・GIGAスクール構想に基づいて、1人1台端末を効果的に活用した授業を実践する力を身に付けることにより、生徒の学びの変容を促す。</p>	<p>・情報課やICT支援員による教員へのICT研修の実施 ・好事例の共有 ・業務・教育のDX化が必要な場面の洗い出し</p>	<p>情報課</p>	<p>昨年度のアンケートにおいて、「Chromebookを活用した授業を実践している」との回答が69.1%（「あてはまる」「ややあてはまる」の合計）に達しており、ICT活用が定着しつつあることが伺える。その一方で、個々の実践事例をいかに可視化し、組織全体で共有していくかが今後の課題である。</p>	<p>【努力指標】 (教員) Chromebookを生徒に活用させながら、主体的で深い学びを目指した授業を実践している。</p>	<p>「Chromebookを生徒に活用させながら、主体的で深い学びを目指した授業を実践している」に、「あてはまる」「ややあてはまる」と答えた教員の割合が、</p> <p>A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満</p>	<p>C、Dの場合は改善策を検討する。</p>	<p>教員対象調査 (7、12月)</p>
---	---	------------	---	--	--	-------------------------	------------------------------------

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評 価 の 観 点	実現状況の達成度判断基準	判 定 基 準	備 考
4 安全で魅力ある学校づくり							
<ul style="list-style-type: none"> ・特色ある教育活動(S SH・NSH事業)を持続できる体制を構築し、その成果を全国的に普及する。さらに、小・中・高・大・企業・自治体等と連携・交流を推進し、能登の科学教育の水準向上を目指す。 ・学校および生徒ひとり一人の災害対応力を強化し、能登の創造的復興を目指して、ひと・もの・こととつながり、社会問題を解決する力を育む。 	学校設定教科「探究」の成果物等の他校への発信	探究課 (S SH) (NSH)	探究課の活動について、これまでの成果の発信と普及が求められている。	【成果指標】 本校が開発した教材を提供し、県内外の他校(中学校を含む)に成果の普及を図っている。	本校の開発教材や報告書のダウンロード数が、前年度に比べて増加数が A 1000件以上 B 500件以上 C 200件以上 D 200件未満	C、Dの場合は改善策を検討する。	開発教材や報告書のダウンロード数で評価
	物理チャレンジ、科学グランプリ、生物学オリンピック、数学オリンピック、全国総合文化祭等の全国規模の各種大会やコンテストへの積極的な参加や応募を奨励	探究課 (S SH)	昨年度は「坊ちゃん科学賞」「科学の芽賞」をはじめ、12件の発表で入賞した。令和8年度に開催される全国総文への出場権を4件獲得した。	【成果指標】 (生徒) 全国大会相当への出場の決定数が増えている。	全国大会相当への出場が決定した個人またはグループ数が A 4以上 B 3 C 2 D 1以下	C、Dの場合は改善策を検討する。	大会結果
	英語に関するコンテスト(スピーチ、ディベート、エッセイ、暗唱、劇など)、弁論大会、その他課題研究コンテスト等への参加や応募の奨励	探究課 (NSH)	昨年度は、左記コンテストなどへの入賞が4件あった。	【成果指標】 (生徒) 左記の大会やコンテストに参加し、実績を上げている。	左記大会やコンテストに参加し A 入賞4件以上 B 入賞3件 C 入賞2件 D 入賞2件未満	C、Dの場合は改善策を検討する。	大会結果
	<ul style="list-style-type: none"> ・アプリの活用 ・AIを活用した効果的な学習方法の研究 	探究課 (NSH) 各学年	昨年度実施したGTEC12月受験でCEFR B1以上の生徒は2年生(Advanced)で119名だった。令和6年度の110名からやや増加した。	【成果指標】 (生徒) 2年生のGTEC12月受験でCEFR B1以上の生徒が昨年と同水準の人数である。	CEFR B1以上の生徒が A 120人以上 B 110人以上 C 100人以上 D 100人未満	C、Dの場合は改善策を検討する。	検定結果 (GTECや英語検定)
	<ul style="list-style-type: none"> ・1年学年団による生徒への防災授業 ・実践的な避難訓練の実施 ・防災知識に関するセルフチェックの実施 	保健課 各学年	石川県では、度重なる大災害を経験したが、生徒一人ひとりが、今後も起こるかもしれない災害に正しく備え、正しい安全行動が取れるよう災害対応力を高めていく必要がある。	【満足度指標】 (生徒) 防災教育を通して災害への備えに対する意識が高まったことを実感できる。	「防災教育を通して災害への備えに対する意識が高まった」と答える生徒の割合の合計が A 85%以上 B 75%以上 C 65%以上 D 65%未満	C、Dの場合は改善策を検討する。	生徒対象調査 (7、12月)

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評 価 の 観 点	実現状況の達成度判断基準	判 定 基 準	備 考
5 働き方改革の推進							
<p>・教職員は「石川県立学校における教職員の多忙化改善実施計画」に基づき不断に業務改善を進めるとともに、「働きがい」を持って教育活動の質的向上に努める。</p>	<p>・情報共有のデジタル化 ・協業についての研修の充実 ・目標の明確化による達成感の共有 ・月4回の定時退校日を設定</p>	管理職	<p>昨年度の月当たりの時間外勤務時間の平均が57.7時間（一昨年度60.4時間）で県の指標（45時間以内）を大きく上回っている。また、80時間を超える職員が固定化されつつあり業務の平準化が課題である。</p> <p>業務の効率化により時間外勤務時間の削減を図ることと併せ、いかに「働きがい」を高めるかも大きな課題である。</p>	<p>【成果指標】</p> <p>観点1 時間外勤務時間の平均及び80時間を超える人数が減少している。</p> <p>観点2 ワークエンゲイジメント指標の平均が高まっている。（UWES）</p>	<p>観点1-① 時間外勤務時間の平均が A 40時間以内 B 45時間以内 C 50時間以内 D 50時間を超える</p> <p>観点1-② 時間外勤務時間の平均が80時間を超える人数が A 3人以下 B 5人以下 C 7人以下 D 8人以上</p> <p>観点2 ワークエンゲイジメント指標（UWES）の平均が A 4以上 B 3以上 C 2.6以上 D 2.6未満</p>	C、Dの場合は改善策を検討する。	教員対象調査（7、12月）